

樽材を使った木工品づくり —想いをつなぐ愛用品としての椅子製作—

森と木のクリエイター科 木工専攻 奥田 真司

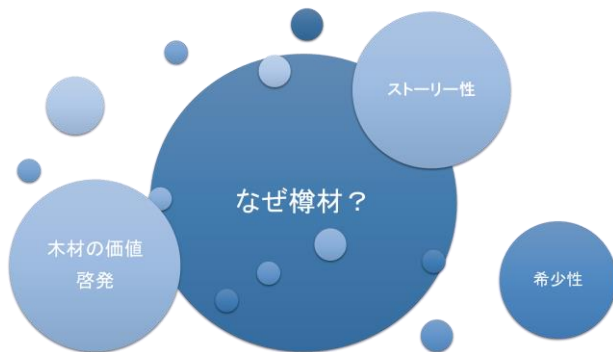
1 研究の背景、目的と意義

ウイスキー製造に携わる知人に樽材を分けてもらった。樽材は樹齢 100 年越えのホワイトオークの柾目板が使用されていた。だが多くは従業員の薪にされていた。極上の木材を活用したいと思った。樽材提供者からの具体的な依頼があったわけではない。自分がやりたいと思った。

樽材には木材として生きた痕跡や樽材として使われた痕跡がありストーリー性がある。そんな材を使うことで単なる消費財ではなく愛用されるものづくりができそうだ。また廃棄されても再利用可能な材料として木材の価値を見直す試みとしても意義がある。

本課題研究では、廃樽材を利用した木工製品づくりを行い、ウイスキー関係者や一般消費者に提示する。そこで愛用品として受け止められるか感触を得ることを目的とする。

樽材を提供いただいた会社は企業イメージを必ずしも向上させないという理由で企業名を伏せさせていただく。



2 方法と内容

(1) ウイスキー樽の生産、使用、廃棄の実態調査

樽材提供を受けた会社と、日進木工株式会社に取材をした。

ウイスキー樽に使用されている木材の 9 割が北米産の樹齢 100 年前後のホワイトオークである。岐阜県産ミズナラも使う試みが始まっている。製造過程は他の木製品同様、乾燥、加工、成形加工となっているが、樽特有の工程「火入れ」によって内側は炭化し焦げた状態になっている。

ウイスキー樽は基本的にバーボン、ビール、ワ

イン、シェリー酒などに使われた樽のリサイクル品である。何度でも繰り返し使うことができ、壊れても修理することもできる。使用年限は、一般に 60 年～70 年といわれる。

樽材を低位教頂いた会社では廃棄を樽の傷み具合で決める。使用年数や樽の染みなどで判断する。廃棄処分される樽は、そのまま商品ディスプレイ用の什器として販売されるほか、従業員の家庭用燃料として活用されている。



廃棄樽置き場

(2) ウイスキー樽を使った木工品の先行事例

事例として、「サントリー樽物語」と「SHIMS FURNITURE」を調べた。樽材を均一化して材料化する方法と、樽材ならではの形状を生かした製品づくりと二つの方向性があった。

(3) 樽材の問題点の克服

樽材には木工製品の材料としてメリットやデメリットがある。問題点として、「色がまちまち」「材が曲がっている」ととらえ、克服方法を考えてみた。

・鉄媒染で統一感を出す

染色にはコストや環境性を考え鉄媒染を選択した。鉄媒染液を塗った直後、タンニン成分を含む木材は青く変色するが時間の経過とともに真っ黒に変わってしまう。変化したばかりの青は美しく、樽の焦げた部分と調和する。鉄媒染を青にとどめる方法はないか調べていたら、江戸時代の浮世絵富岳三十六景に、鉄媒染によって生み出した青「プルシアンブルー」という色が使われていること知った。実験を重ね鉄媒染液に黄血塩溶液を加えることで木材を青に染めることに成功した。

・鉄媒染で意図する青に染める方法

鉄媒染で黄血塩を使用し青くするためには、鉄媒染液を木材に塗布後、乾燥する前に黄血塩溶液を塗布することが有効だった。また、導管に色がしみ込みにくいことへの対処としてはメチルアルコールに混ぜ表面張力を抑えることでよい結果が得られた。

・鹿血液由来の黄血塩で青い鉄媒染を実現する

明宝ジビエさんより鹿血液の提供を受け取り組んだ。鹿血液は多くの鉄分を含み黄血塩が得られた。「森の恵み」の染色として可能性を感じた。

・曲がった材をまっすぐにする

初めに50分間蒸した後プレス機で押さえた。わずかな「そり」が残った。次に、サントリーの技術を応用し、打撃を100回ほど加えた。わずかな変化があったがまっすぐにはならなかった。さらに25分間蒸した後打撃を加えたら、材が破損した。手間のわりに思うような結果が出ないことから「曲がったまま利用する」という考えに方針を変えた。

(4) バレルチェアの製作

まずはカウンターチェアを製作した。基本的には「グリーンウッドワーク」の椅子づくりの方法を踏襲した。基準面をつくるために材の両端を平行に加工した。湾曲した脚にほぞ穴を掘るため、ボール盤に設置する治具を二組用意した。労務、材料、副資材、減価償却、光熱、利益を計算すると原価1脚45000円になった。これに利益を加えて販売価格となる。値段に見合うクオリティーの高さを表現する必要がある。



カウンターチェア

(5) バレルチェアのテスト

翔楓祭のお客さんや在校生、先生方から様々な感想をもらった。また、カウンターバーのある「じゃがたら厨房 PATATA」さんに1か月使用してもらい感想をいただいた。マイナス面としては強度に対する不安感、足当たりの違和感、触感のわるさなどがあった。生活技術研究所での強度テス

トはクリアした。座面・テーブルの高さ・足置きとの位置関係を平均身長より低めに合わせる必要を確認した。

(6) ダイニングチェアの製作

樽材の湾曲を背もたれに生かした。材は25mm厚、25mm巾、ほぞ穴は15mmの丸ほぞを採用した。

自宅で試用すると、背もたれ付け根のほぞが崩壊した。強度不足だった。足を30mm 35mmに太くすること、前後、左右のほぞ位置をずらすことで脚の強度を向上させた。

研究の成果である鹿血液由来の黄血塩を使用し青い鉄媒染を施した。座面には樽材の隙間を埋めるために使用されるガマの葉を使用した。



ダイニングチェア

3 課題研究のまとめ

成果としては、樽材の曲がりを生かし、鹿血液を使った染色で色調を整え、ガマの葉で編んだストーリー性のある製作物が実現できたことだ。それで関係者や一般の方にも一定の評価を得ることもできた。興味を持ってくださり、ほしいといてくださる方がいた。さらに、ご協力いただいたウイスキー醸造所の方にも試飲コーナーへの設置も検討いただけるなど高評価を得た。ストーリー性のある品物は人の心に届く可能性があると感じた。

課題としては樽材の安定的な確保の問題がある。今後の活動には定期的な入手先が必要となる。さらに、作りこむこととストーリー性の両立です。綺麗に作れば作るほど方向性を見失い、ともすると誰でもつくれどこでも売っているものに近づいてしまうことがあります。消費されるものではなく愛用されるものづくりはこれからもクリエイティブな精神が必要だと感じた。